

苫小牧高専第2回英語学力テスト実施報告

堀 登代彦*・山西敏博**・東 俊文***
松田奏保****・小野真嗣*****

The Report of the 2nd English Language Proficiency Test
in Tomakomai National College of Technology

HORI Toyohiko, YAMANISHI Toshihiro, HIGASHI Toshifumi
MATSUDA Kanaho, ONO Masatsugu

abstract

This report shows how students took English proficiency tests and how teachers should evaluate the result of the exams. In addition, we examine the students' proficiency in English and present our prospects of how we should improve the way of teaching English in our college.
Last school year, our college gave English tests to the 1st, 2nd and 3rd year students for the first time and got a lot of useful data for our English-teaching ways. This school year, however, these exams have been extended to the whole school, from the 1st year to the 5th year students. We will also analyze how their ability in English has been improved.

1. はじめに

昨年度、本校では初めて外部テストを使用した英語学力テストを実施した。これは平常授業日の全授業終了後の遅い時間帯に、対象を1年生から3年生の3つの学年に絞った上で行なわれた。本校紀要の前号でも報告した通り、これによって英語学習指導上の有益なデータを数多く得ることができ、また実施運営上予測された様々な問題点にも対処できる目途がついたことから、今年度は、「統一テストの日」という特別な行事日を教務的に設定した上で、対象を本科全5学年にまで広げて実施した。
本論では、始めに、全校的なバックアップを受けて実施できた今回のテストの実施運営方法を述べてから、本稿の核心部分として、使用した3種類の外部テストの概要説明および成績結果の提示と分析を行ない、さらに学生への事後アンケートの結果分析も行なった上で、最後に、英語学力テストを含む本校英語教育の今後への展望も記してみたい。
なお、この英語学力テストを実施する意義目的は紀要前号で詳細に述べたが、今一度今回の実施要領から抜粋して掲載する。

*	助教授	文系総合学科
**	助教授	文系総合学科
***	助教授	文系総合学科
****	助教授	文系総合学科
*****	講師	文系総合学科

英語学力テスト実施の目的

グローバル化に対応できる国際的コミュニケーション能力を持つ技術者を育てるのに、実用英語能力を高めることは必須条件であり、その方策の一つとして外部試験を導入することとした。外部試験を定期的に受験することによって、出題範囲が狭く限定された校内での中間・定期試験とは異なり、年毎の各自のトータルな英語力の伸長度が世間の客観的な評価基準に基づいて把握できる。従って、その後の英語学習の目標設定がしやすくなるし、J A B E E 目標や本校中期目標へ到達するための目安にもなる。従来の高専生に欠けがちだった平常の英語学習への動機付けを高めることも可能となる。

2. 学力テストの実施運営方法

1. でも述べたように、2年目の今回は、前期定期試験終了直後の9月30日（金）を、「統一テストの日」として教務的に設定した。平常授業は全く行わず、英語学力テストのみ全5学年 25 クラス一斉実施という、いわば全校的学校行事の形態をとった。そのため、教務主事団と総合学科だけでほぼ実施運営を行なった昨年度とは異なり、専門学科やその他各部署からも協力を仰ぐため、以下のような流れで事前準備および試験当日の業務を遂行した。

2. 1 教職員および学生への告知

試験の実施方法等に関しては、年度当初から英語科内で検討を重ね、また教務主事団とも数度の打ち合わせを行ない、6月30日の教務委員会で実施要領案が承認された。この実施要領は、試験監督者割当表とともに、9月中旬に再度、サイボウズを通して教務主事名で全教職員に告知された。

また学生に対しては、夏休み明けの8月下旬から9月上旬にかけて、クラス担任教員の方から実施告知の掲示物を教室内に貼付してもらうと同時に実施の旨を伝えてもらい、さらに英語教員が授業時に、試験実施の意義目的や教務的取扱い方法などについて、学生に説明を行なった。

2. 2 試験監督説明会

テスト実施3日前の9月27日に、試験監督に当たった教員（総合学科15名、専門学科10名）を対象に、試験監督説明会を実施した。試験当日の監督業務の概要から細部まで、全体説明と個別説明（各テストごと）に分けて約1時間行なったが、3、4年生で実施するACE（英語運用能力テスト）に関しては、その実施方法が他のテストと比べて複雑であることから、特に時間をかけて入念な説明を行なった。以下に示すのは、全体説明用の資料である。

A. 試験当日の監督業務（大まかな流れ）

8：30～ 8：40 大会議室で監督者用物品一式の受け取り

（ただし音声機器は事前に英語教員が教室に搬入）

8：40～ 8：45 試験会場への入室（出欠確認、音声機器の確認など）

8：50～ 9：00 受験者データの記入

9：05～ テスト開始 (内リスニング試験時間帯)

テスト終了 1, 2年生 ～10：05頃 (9：05～9：30)

3, 4年生 ～10：30頃 (9：05～9：42)

5年生 ～11：05頃 (9：05～9：50)

試験終了後・・・大会議室で物品返還（音声機器は教室に置いたまま。CD・カセットテープは抜き取り）

B. 注意事項

1. 座席・・・学生は出席番号順に着席（連絡済）。

2. 遅刻者・・・リスニング試験中の場合は、リスニング試験が終わるまで入室させない。

3. 欠席者・・・学生名簿の備考欄にチェックを入れ、問題・解答用紙は回収する。

4. 途中退室・・・特別な事情がない限りは認めない。
5. リスニング試験
 - ①教室のドアや窓などの閉鎖・・・近隣教室への音声漏れ防止のため。
 - ②適度な音量の確保・・・大きすぎると近隣教室で音声が混ざり合い、解答の妨げとなるので、全学生が無理なく聞こえる程度の音量にする（初めに最後列の学生に確認）。
6. 巡回・・・試験中のトラブルに備えて、英語科教員が校舎内を頻繁に巡回する。
7. 問題用紙の回収・・・1, 2, 5年生では問題用紙も必ず回収する。3, 4年生は回収不要。
8. 試験終了時の伝達事項・・・1～4年生の監督教員は、学生に、「高学年はまだ試験中なので教室や廊下など校舎内では静粛を保つ」よう伝えて下さい。

2. 3 試験当日の実施運営状況

9月30日（金）の試験当日は、多くの関係教職員の協力を得て、目立ったトラブルも発生せず、当初の計画通りに無事終了することができた。

我々が最も心配していたのは、リスニング試験時に起こりうる各種トラブルであった。昨年度に指摘された、近隣教室への音漏れや、先に終了した学生による騒音に対しては、教室のドア・窓の閉鎖や適度なCD音量の確保を監督教員にお願いし、英語教員による巡回も頻繁に行なうことにより、今回はうまく対処することができた。また、音声機器の操作上のトラブルは起こらなかったが、あるクラスで試験開始直後に微かな音飛びが生じたことから、予備の機器と取り替えるのに多少の時間ロスがあったようだ。さらにリスニング試験時の、遅刻者の途中入室や途中退室者の再入室の問題については、大多数の受験者への良好な試験環境確保を最優先して、リスニング試験が終わるまでは途中入室できないこととした。

学生の出欠状況に関しては、昨年同様、全体的には大きな問題はなかった。当日欠席した学生は、特欠や停学を除くと合計20名、1クラス当たり1名弱というところだった。英語Aまたは英語Cの成績評価にも入り、欠席すると0点扱いになることも、出席率を向上させた理由の1つかもしれない。

3. 英語能力判定テスト——1, 2年生対象

3. 1 テストの概要

1, 2年生用のテストは財団法人 日本英語検定協会主催の「英語能力判定テストC（1年生用）・B（2年生用）」を用いた。このテストは「同協会が開発した学生の英語能力を短時間かつ低価格で測定できる使いやすい新テスト」（英検協会,2005）として近年全国の中学・高校・高専等で用いられている Placement Test と位置づけされている試験である。このテストの特徴としては以下の3点が挙げられる。

- 1) 学年や能力に適した問題を使用することによる正確な能力の測定
- 2) IRT（項目応答理論）に基づく絶対評価のスコアでの結果表示のため、同じ尺度上で同一学生の能力の伸びをみる事が可能
- 3) ウィークポイントを把握でき、指導・育成に役立つ 全体のスコア以外に（1）語彙・熟語・文法（2）文章構成（3）読解（4）リスニングの4分野での正答率が表示されることによる受験者全体の傾向の把握と、受験者本人に対する現時点での分野別英語力の把握に役立つ。（英検協会,2005）¹⁾

更にテストの詳細としては以下の2点の利点がある。

- 1) 受験者は現在の英語能力を的確に把握でき、英検受験の目安としても活用可能である
例：「あなたは準2級レベルの力があります」として判定・表示される
- 2) 難易度が異なるテストでもスコアは同様に比較でき、難易度分析データによる同じ尺度上での等化処理が可能である
例：「テストB（2年生用）のスコアが400の受験者と、テストC（1年生用）のスコアが400の受験者は同じ能力を有している」（英検協会, 2005）²⁾

IRT（Item Response Theory）とは、受験者が1つ1つの項目（問題）に正解（または不正解）していくその応答パターンを用い、その受験者の能力レベルを計算する理論である。全ての問題には予め難易度分

析データがついており、同じ尺度上で等化処理がなされているために、テスト集団のレベルやテスト種類に左右されることなく、個人の能力を絶対スコアで表すことができるという要素を占めている。
(英検協会, 2005) ³⁾

これらの利点を持った試験を活用していくことで、低学年には英語の基礎学力を身につけさせ、そこから TOEIC といった実用英語技能検定試験を受験させるという段階を踏むことによって、より発展性のある学力の向上を目指すことができるという合意の下に、これらの試験を始めた。

3. 2 成績結果
3. 2. 1 全体結果

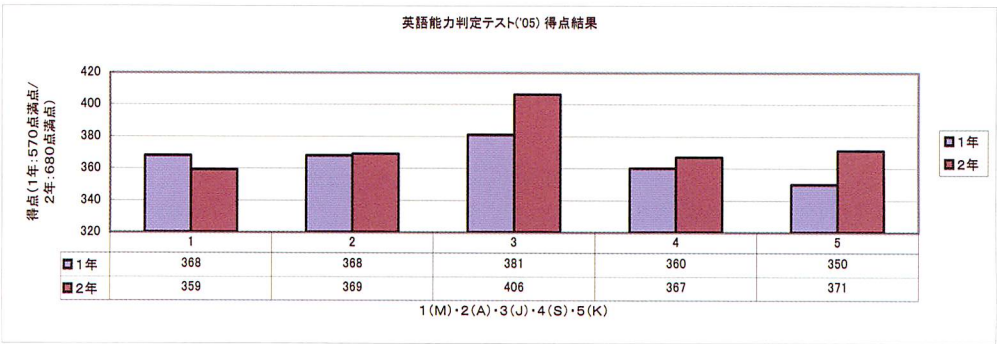


図 1 Means : 1 年生 365 / 2 年生 375

表 1 1 年生

	N	Mean	STD
M	42	368.1	42.0
A	41	367.7	47.8
J	38	381.1	42.2
S	40	360.2	47.0
K	38	349.7	45.5

表 2 2 年生

	N	Mean	STD
M	38	359.0	51.3
A	39	368.6	44.6
J	42	406.3	50.9
S	41	367.2	50.3
K	38	371.3	45.2

3. 2. 2 1, 2 年生における実用英検相当級と英検取得時期

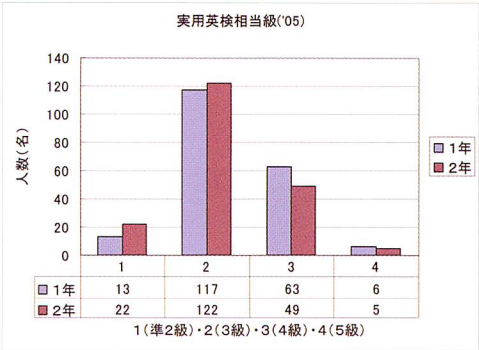


図 2

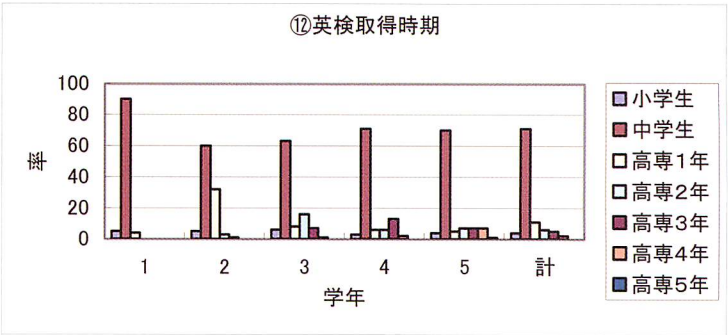


図 3

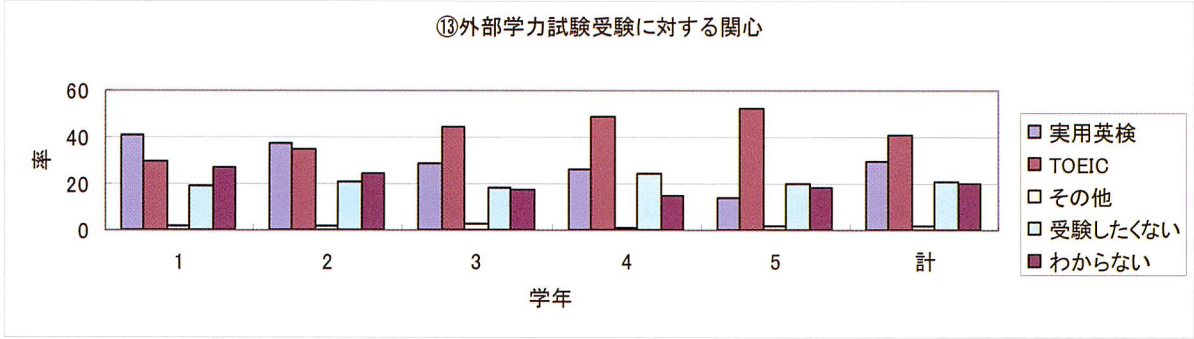


図 4

3. 2. 3 2004 年度との比較

表 3

	満点	M	A	J	S	K	平均
2004 度の 1 年生 (テスト C)	570	369	372	390	368	355	371
2005 年度の 2 年生 (テスト B)	680	359	369	406	367	371	375
差		-10	-3	+16	-1	+16	+4

表 4 * p < .01

1 年 VS 2 年	
Pearson-r	.496*

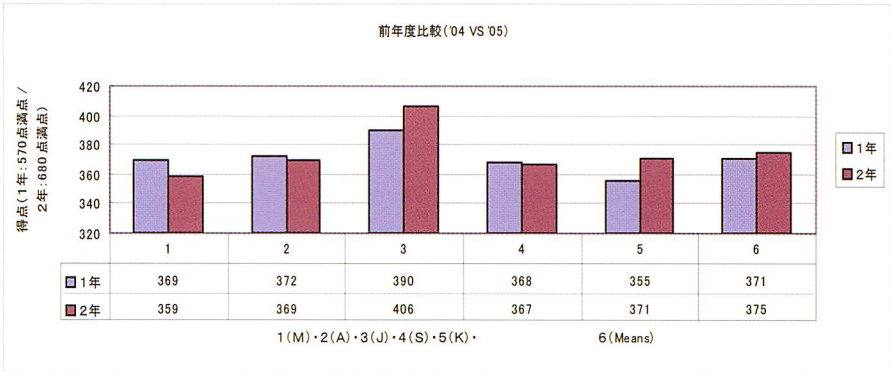


図 5

3. 3 分析・考察

上記の結果を分析するにあたっては SPSS11.0 を用いて、1，2 年生各 5 学科間の平均値の差を One-Way ANOVA を施し、更に多重比較を行なうために Bonferroni 法比較、Tukey 法比較及び Test of Homogeneity of Variances (THV)を用いながら統計処理を行なった。その結果 3. 2. 1 に関しては、1 年生間では One-Way ANOVA では $F(4,194)=2.527, p=.42$ となり、各学科間の平均値の差は有意であった。よって、これより各学科の平均値に差異があることが立証された。更に Bonferroni 法比較、Tukey 法比較による多重比較の結果としては $p>.05$ より等分散性は不成立となったものの、J と K との間でのみ 5%水準で有意差があった。

続いて 2 年生間では One-Way ANOVA では $F(4,193)=5.877, p=.00$ となり、各学科間の平均値の差は有意であった。よって、これより各学科の平均値に差異があることが立証された。更に Bonferroni 法比較、Tukey 法比較による多重比較をした結果、 $p>.05$ より等分散性は不成立となったものの、J と M, A, S, K それぞれの間で、5%水準で有意差があった。

3. 2. 2 については、1，2 年生における実用英検相当級獲得者数の比較をした場合、どちらの学年とも図 2 より 3 (中学 3 年生終了相当) に対して最も多数値が出た。このアンケート実施時期が 9 月末ということもあり、実際英検については第 1 回試験での結果しか出てはいないために級取得者の数が少

ないことは否めない。これについては年度末に改めて調査を実施し詳細な分析を図ることが課題であるが、現段階で言えることは図3より1年生では中学生の時に取得をしたものであり、2年生もほぼ同様の傾向が見られた。学年全体を通してみた場合には、そのほとんどが中学生段階までの取得で終了してしまっているために、高専に入学後は英検でより高い級を取得するという意欲に著しく欠けているという傾向が散見されている。一方、2年生においては1年次に受検を試みた者は中学時のほぼ半数を占めていることから2年生の意欲の向上は見られよう。他方、3. 2. 3 においては図4より3年生以上においては同じ資格試験を受検するのであれば、英検よりも TOEIC を受験したいという意欲を持つ者が数多く現れていることから、その意識が英検よりも TOEIC に傾いていっていると分析することもできよう。いずれにしても因子分析等を用いて、より詳細な分析が今後とも必要である。

3. 2. 4 においては2004年度と2005年度における同一学生間の平均値の差を、有意水準5%で両側検定の T-test により検討を行った。その結果 $t(398) = -.838, p = .402 (> .05 : n.s)$ であったことから、これらの平均の差は有意ではなかった。

しかしながら、1, 2 学年ごとにおける相関係数を図ると、Pearson $r = .496$ となり、ある程度の相関があることが立証された。加えて回帰係数も測定すると、各学科、そして学年全体から推定した時には以下のような測定式が算出された。

$$\begin{aligned} (\text{M2 年次のスコア}) &= 90.627 + 0.728 && X & (\text{M1 年次のスコア}) \\ (\text{A2 年次のスコア}) &= 158.779 + 0.564 && X & (\text{A1 年次のスコア}) \\ (\text{J2 年次のスコア}) &= 319.804 + 0.224 && X & (\text{J1 年次のスコア}) \\ (\text{S2 年次のスコア}) &= 46.359 + 0.881 && X & (\text{S1 年次のスコア}) \\ (\text{K2 年次のスコア}) &= 299.862 + 0.203 && X & (\text{K1 年次のスコア}) \\ (\text{全2 年次のスコア}) &= 174.360 + 0.543 && X & (\text{全1 年次のスコア}) \end{aligned}$$

以上の点より、2年次においては1年次よりも英語学力は向上したとすることができる。

3. 4 今後への展望

上記の3. 2. 1 から3. 2. 4 までの結果の分析を踏まえて、今後の展望を記す。

3. 2. 1 に関しては1, 2 年生とも入学時より各学科間に学力差があることは否めないものの、今後はいかにその上げ幅を大きくしていくことができるかが、今後の高専全体としての英語学力向上につながるっていく指針となるであろう。加えて1年生においては複数教員による学習指導がなされている。現在の指導方法は個々の教員に委ねられている実態であるが、この連携を密にしていくことにより、常に最善となる指導方法が得られるように相互に高めていくことが不可欠である。そうすれば5 学科間全てにおいて獲得得点の間で有意差が見られるようになっていくであろう。学校全体の英語学力を向上していくにあたっては、このように Collaborated Teaching (CT) としての密接な連携が必要になってくるものと思われる。

他方、2年については5 学科間全てにおいて獲得得点の間で有意差が見られた。これは今年度における試験の実施月が昨年度(7 月実施)よりも2 ヶ月遅かったということから、昨年度の1 年生(今年度の2 年生)の方が学習期間が長かったことが誘引となっていると思われる。前述したように CT による連携を行っていくことで、今後はこれまで以上の効果が望めるものと考えることができる。

3. 2. 2 及び3. 2. 3 においては、英検を始めとする資格試験へのより積極的な促しが必要であろう。学校全体は最終的には TOEIC での一定点数での取得を義務付けている。しかしながら、現段階においてはその一定点数「400 点相当以上」を獲得することで評価するというものは専攻科修了時のみに限定されている⁴⁾。一方、本科生においては「英検2 級以上」の取得者に対して2 単位以上の単位を認定するという内規はあるものの⁵⁾、JABEE 関連の拘束の強化で授業は受講しなけりばならず、試験のみが免除されるといった、従来の規定よりも利点が少なくなっているとして学生側は判断するためか、必ずしも学生全体としての2 級以上取得の意欲向上には結びついてはいないのが現状である。このような特典のあるなしに関わらず学習意欲への向上に結びついていくことが前提ではあるものの、秋田高専のように「英検準2 級を2 年生までに取得できる力を授業内で養い、その力を基礎学力として TOEIC IP への得点向上

につなげることができた」という実証例もある⁶⁾。他方、本科を卒業した学生が同専攻科に進学を希望する者がここ数年多くなっている現状を踏まえても、前述したように TOEIC を受験したいという意欲を持つ者が数多く現れている実態があることから、こういった例のように「英語ができる技術者」養成を考慮に入れている本校においては、一定の資格試験取得を本科の卒業要件に入れていくことも場合によっては必要になるのではないかと考える。

3. 2. 4においては同一学生間の平均値の差を測った結果有意差が出なかったことより、同一学年での関連性は見られなかったものの、1, 2 学年ごとにおける相関は高いものがあったことから、英語学力は学年を経るごとに確実に上昇はしており、回帰係数上でも一定の測定式が算出されることから、その上昇に関して規則性は見られるものと推測される。従って、今後とも予習、復習などといった規則正しい学習習慣を身につけさせていくことができれば、これらの学力の向上は安定して見られていくことと考えられる。

4. 英語運用能力テスト (A. C. E.) —— 3, 4 年生対象

4. 1 テストの概要

A C E は、日本の中学・高校での学習内容をベースに作成され、学校のカリキュラムで学んだことがどれほど定着しているか、また運用できるかを、語彙・文法・リーディング・リスニングの4分野別に絶対評価で測定するテストである。1 回のテストの中で、中学既習レベルから高校3 年レベルまでの設問が易から難へと配列されており、また毎回のテストの難易度がほぼ一定に保たれているので、複数回受験すると、学生一人一人の4 分野別の英語力の伸びを測定でき、各学生の英語力のプロフィールを客観的に把握することが可能となる。

試験時間は 80 分で 900 点満点、その内訳は、リスニング (35 分) 300 点、語彙・文法 (15 分) 300 点、リーディング (30 分) 300 点となっている。(語彙と文法は各 150 点)

出題分野別の特徴としては、次のようなことがあげられる。リスニングでは、図表・挿絵・写真などを併用してより実的な状況設定をしており、また大意把握問題・情報収集問題・総合リスニング問題の3 セクションに分け、セクションが進むにつれてより高度なリスニング技能が求められる。語彙・文法では、学校教育で重視され、なおかつネイティブ・スピーカーが日常的に使用する語彙・文法事項が、易から難へと難易度に傾斜をかけて設問される。初めが中学既習レベル、中盤が高校1, 2 年レベル、終盤が高校3 年レベルとなっている。リーディングでは、限られた時間内で大量の英文情報を収集したり、瞬時に情報を把握するといった、主に速読型の読解技能をテストしている。

4. 2 成績結果と分析・考察

4. 2. 1 全体の概要

表 5 3 & 4 年生クラス別平均点

	M	A	J	S	K	全
3 年生	485	439	489	448	439	460
4 年生	480	459	522	475	435	474

表 6 3 & 4 年生技能別平均点

	V&G	R	L	計
3 年生	139	154	167	460
4 年生	144	159	171	474

V & G : 語彙 + 文法 / 300、R : リーディング / 300、L : リスニング / 300

4 年生は昨年度に続き 2 回目の A C E 受験、3 年生は初めての A C E 受験であったが、この二学年間の平均点差は 14 点しかなかった。(表 5)

クラス別で見ると、最高クラスと最低クラスの開きは 3 年生で 50 点、4 年生で 87 点と、上の学年でより大きな開きが出ていることがわかる。また両学年とも、J > M > S > A ≧ K の学科順となっている。

技能別では、どちらの学年ともリスニングで最も高い点数、語彙・文法で最も低い点数、リーディングがその中間となっている。(表 6)

4. 2. 2 4年生の英語力の推移

現4年生は昨年の7月上旬にもACEを受験しているので、この1年2ヶ月余りで英語力がどれほど上がったか（または下がったか）を、様々な観点から知ることができた。

まず表7（図6）から、全クラスにおいて英語力が上がっていることがわかる。最大56点、最小でも34点で、平均すると46点上昇している。世間では以前から、高専生の英語力は学年が上がっても進歩しない、学年が上がるにつれて逆に下がっていくのでは、などという噂も一部に流れていたようだが、このデータによって、それらの噂は全く正当性がないことが実証され、まずはほっと胸をなでおろした。

技能別の変化（表8・図7・図8）では、リーディングとリスニングの双方で確実に力がついていることが判明したが、その一方で、語彙・文法で僅かながら点数が下がっていることもわかった。この点については、より実地的なテスト形式である読解や聴解の方でスコアが伸びていることから、実用的な英語力は着実に身につけていると考えられ、大した懸念材料とはならないであろう。もちろん、語彙・文法セクションでもスコアが上がり、それに越したことはないのであるが。

また図9は、前回の成績レベルで分けた5つの集団（上位・中位の上・中位・中位の下・下位）が、それぞれ今回どれほどスコアを上昇させたか示したものである。これを見ると下位の2集団と最上位集団で、スコアが比較的上昇していることがわかる。下位集団が伸びているのは、前は慣れないテスト形式に対して学生が戸惑ってしまい、結果として低スコアに終わったため、今回は逆に伸び幅が大きかったためとも考えられる。あるいは、成績中位の者より下位のの方が進級への危機感が強かったため、この1年間

表7 クラス別1年間の成績変化

	M	A	J	S	K	全
16-3年	423	420	466	430	401	428
17-4年	480	459	522	475	435	474

表8 技能別1年間の成績変化

	V&G	R	L	計
16-3年	147	131	150	428
17-4年	144	159	171	474

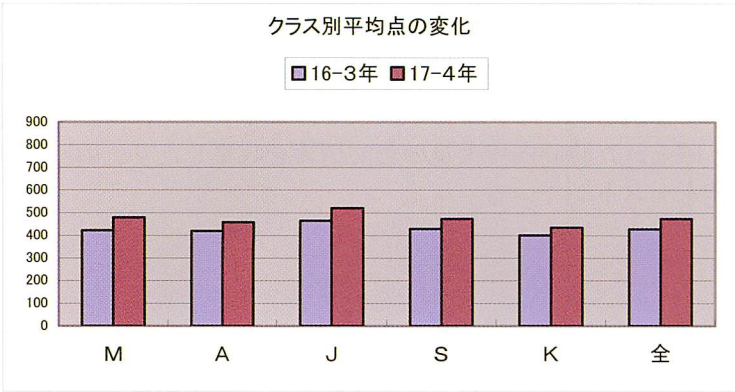


図6

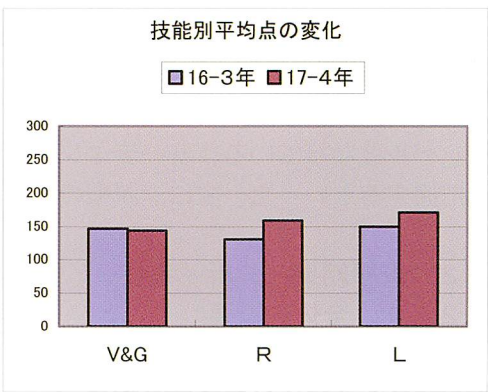


図7

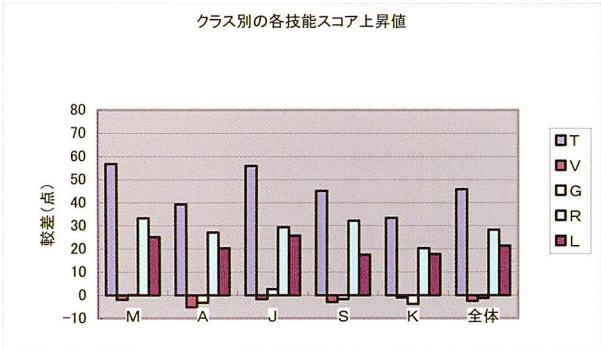


図8

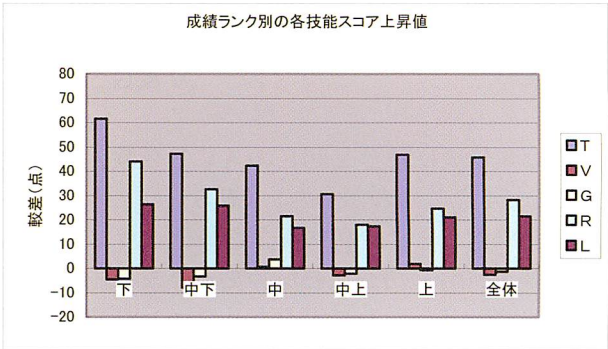


図9

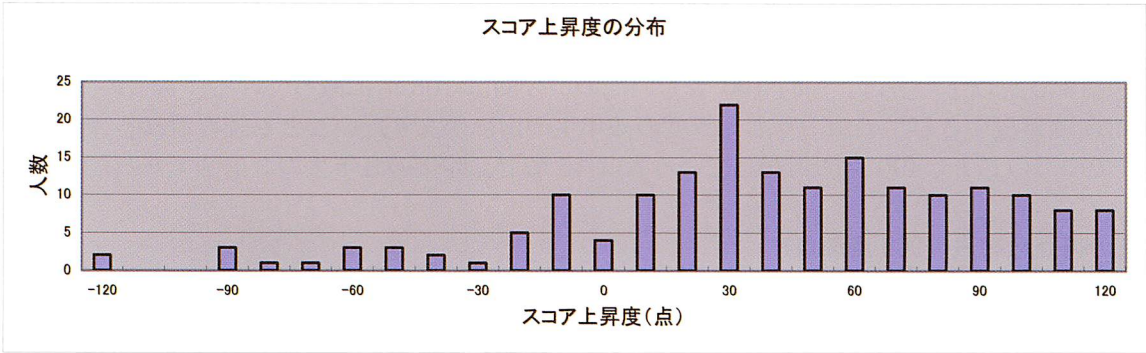


図 10

英語学習に力を注ぎ、結果的にACEの成績を伸ばしたと解釈することもできる。
さらに図 10～12 は、スコア上昇（あるいは下降）の程度がどれくらいの者が多かったかを表している。83%の者が前回よりもスコアを上げており、その内 30 点台アップの者が最も多いが、10 点台アップから 100 点台アップまでが各 10～15 人と、ほぼ均等に分布している。

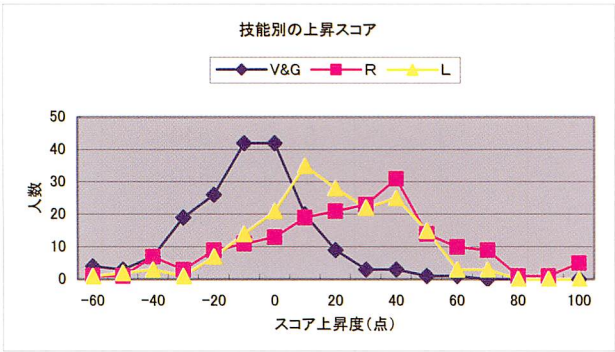


図 11

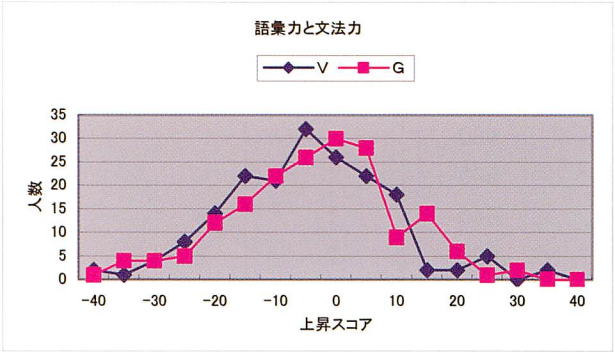


図 12

4. 2. 3 ACEレベルとTOEIC相当スコア

表 9 は、今回（17 年度 3 年生と 17 年度 4 年生）と前回（16 年度 3 年生）の ACE 得点分布である。この表から ACE スコアを、ACE レベル・TOEIC 相当スコア・英検相当級の 3 者と対応させることができる。

ACE レベルというのは、ACE を作成している ELPA（英語運用能力評価協会）が独自に作り出した基準で、総合点および各技能別得点が 5 段階レベル（High Advanced, Low Advanced, High Intermediate, Low Intermediate, Elementary）で表示される。このレベル値自体から、受験者の英語学力に関する具体的な情報を得られる訳ではないが、複数回受験した場合には、比較のための一つの指標として用いることはできる。例えば表 10 から、現 4 年生に関して、レベル 3 以上の者が昨年は僅か 6.7% だったのが、今年は 28.9% に増えたことがわかる。また表 11 からは、今年の 3 年生と昨年の 3 年生を比較すると、レベル 3 以上の者が昨年より今年の方がかなり多いことがわかる。

しかし実際には、ACE スコアよりも TOEIC スコアの方が、受験者にとっては具体的な意味を持つことから、ELPA が独自に、表 9 で示される TOEIC 相当スコアを算出している。これは、ACE 受験者へのアンケート調査から、実用英検取得級と ACE スコアの相関を割り出し、それと TOEIC 運営委員会が公表している TOEIC スコアと実用英検取得級の相関を組み合わせることにより、ACE スコアと TOEIC スコアの相関関係を導き出したものである。

表9のACEスコアとTOEIC相当スコアをグラフ化したのが図13である。図13から、この1年間でのTOEIC相当スコアの変化を見ると、分布の山が20点ほど高スコアの方へ移動していることがわかる。そして、本校卒業時の目標である400点への到達者が、昨年度は僅か5名だったのが、27名に増えている。逆に350点以下の者は、前回160名もいたのが今回は105名に減っている。さらに、現3年生の分布の山が、昨年度の3年生の山よりも今年度の4年生の山にかなり近いことも読み取れる。因みに、現3年生ですでにTOEIC400点に到達している者は16名で、昨年の3年生の3倍強であった。

表9 ACEの得点分布表(900点満点)

ACE レベル	ACE スコア	17年度4年生		16年度3年生		17年度3年生		TOEIC 相当スコア	英検 相当級
		人数分布	累積	人数分布	累積	人数分布	累積		
5	900- 880- 860- 840- 820- 800- 780-	1	1						準1級
						1	1		
						2	3		
								700-	
4	760- 740- 720- 700-	1 2 1	2 4 5	1 1	1 2	1	4	680- 640- 600- 560-	
3	680- 660- 640- 620- 600- 580- 560- 540- 520-					1 1	5 6	540- 520- 500- 480- 460- 440- 420- 400- 380-	2級
		1	6	1	3				
		2	8						
		1	9	2	5	3	9		
		7	16			4	13		
		11	27			3	16		準2級
		9	36	1	6	12	28		
		16	52	6	12	17	45		
2	500- 480- 460- 440- 420- 400- 380-	23 22 22 25 12 12 6	75 97 119 144 156 168 174	8 17 22 37 27 29 17	20 37 59 96 123 152 169	25 19 35 18 21 10 11	70 89 124 142 163 173 184	360- 350- 340- 330- 320- 310- 300-	3級
1	360- 340- 320- 300- 280- 260-	3 1	177 178	7 3 1	176 179 180	8 2 4 1	192 194 198 199	290-	
		1	179						
		1	180						

※ACEスコアで540-が9人とは、540～521が9人という意味。TOEIC相当スコアも同様。

表 10 ACEレベルの変化（ア）

	1	2	3	4	5
16-3年	6.1%	87.2%	5.6%	1.1%	0.0%
17-4年	3.3%	67.8%	26.1%	2.2%	0.6%

表 11 ACEレベルの変化（イ）

	1	2	3	4	5
16-3年	6.1%	87.2%	5.6%	1.1%	0.0%
17-3年	7.5%	69.8%	20.6%	0.5%	1.5%

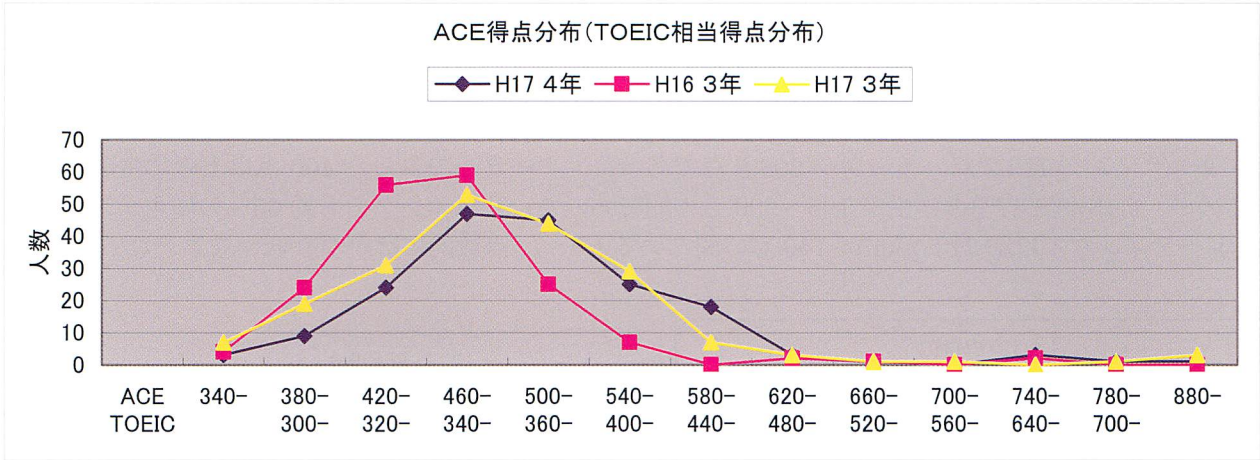


図 13

4. 3 今後への展望

前項では視点を少しずつ変えながら、今回のACEの成績結果を分析した。そして、4年生が全体的にはこの1年間で着実に英語力をつけてきたこと、また3年生の英語力が昨年の3年生に比べると結構高いことも確認できた。

ただしACEスコアとTOEICスコアの相関が、十分に信頼できるものかどうかという点に関しては、多少の不安も残っている。ACEは開始されてからの年数がまだ浅く、現時点ではデータの蓄積が十分ではないと思われる。おそらく今後回数を重ねるにつれて、より正確度を増したTOEIC相当スコアが算出されていくのであろう。その意味でも、来年度5年生のTOEIC-I Pの成績結果が、非常に興味深く待たれるところである。それまでの2年間ACEを受験してきた学生が、果たしてどのような相関をTOEIC-I Pのスコアで見せるのかということは、ACEというテストの価値を判断するための試金石のひとつになるかも知れない。

しかし、それ以上に注目していることは、来年彼らがTOEIC-I Pでどのくらいのスコアを出せるかということである。現4年生は、入学時から全クラス統一して様々な副教材を導入し、単語テストや聴解テストや速読テストなども頻繁に実施するようになった最初の学年である。初めての学力テストがいきなりTOEIC-I Pだった現5年生とは異なり、それまで2年間（試行テストも入れると3年間）すでに学力テストも経験してきている。その成果が、どれほどのスコアとなって出てくるのか、非常に興味深い。

5. TOEIC-I P —— 5年生対象

5. 1 テストの概要

今回の英語学力試験で、5年生にはTOEICのI P（団体特別受験制度）を受検させた。TOEICは現在、多くの企業や学校で英語能力の基準として用いられるようになってきており、国際的に通用する技術者の輩出を目標としている本校においても、TOEICを用いたレベルチェックが必要となってきたということを踏まえての導入である。またこの5年生が4年生だったときから、英語Cの授業においてTOEIC対策の練習を取り入れており、1年半の授業におけるTOEIC対策の成果も今回計ることができると考えた。

テストはリスニング（45分・100問）とリーディング（75分・100問）からなり、2時間で200問である。リスニング5～495点、リーディング5～495点で、トータル10～990点のスコアで評価される。以下に本校5年生のTOEIC I Pの結果と、TOEIC運営委員会が発行している「TOEICテスト DATA&ANALYSIS 2004」による、平成16年4月から平成17年3月までの学校IPテストデータを示し、比較検討する。

5. 2 成績結果と分析・考察

まず今回の5年生の結果である（図14～17、表12・13）。168名が受験し、平均点はリスニング186.6点、リーディング112.2点、トータル298.8点であった。トータルでみると400点以上の学生が20名いるものの、全体の約47%の学生が195～290点の間であった。リスニングでも約65%の学生が145～240点、リーディングでは約71%が45～140点の間にいるという、点数的にはかなり低い結果となっている。

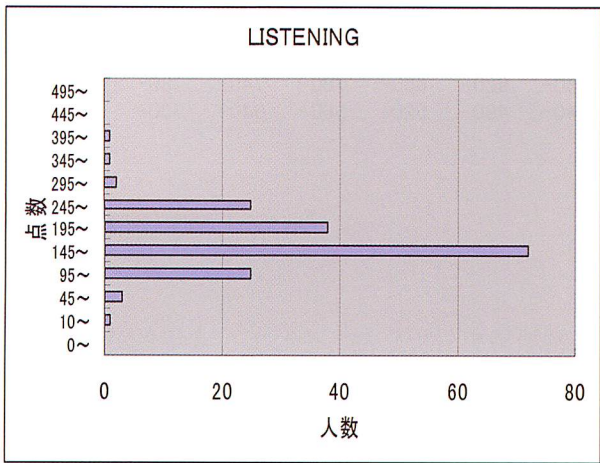


図14 リスニング・パートの人数分布

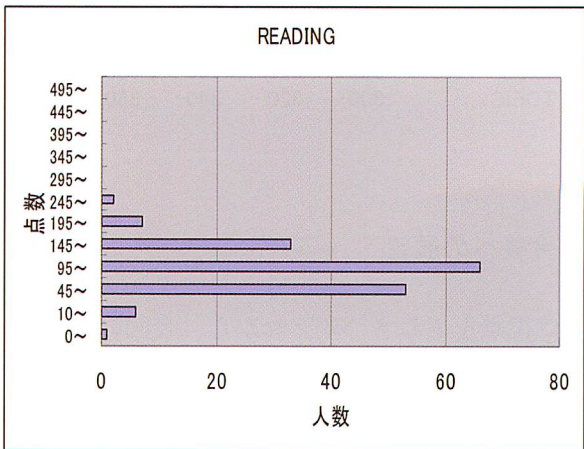


図15 リーディング・パートの人数分布

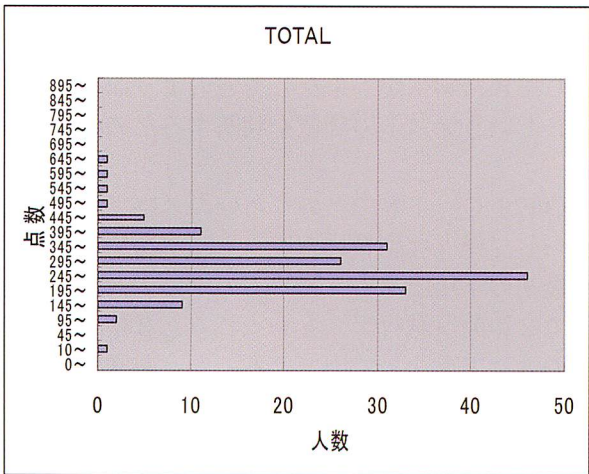


図16 合計点の人数分布

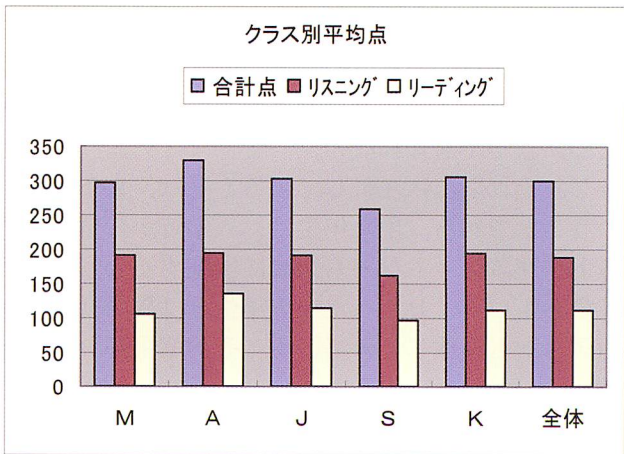


図17 クラス別の平均点

表12 クラス別の平均点

	M	A	J	S	K	全体
合計点/990	297	329	304	260	306	299
リスニング/495	191	194	190	163	195	187
リーディング/495	106	135	114	97	111	112

表 13 合計点分布表

得点	合計点/990	
	分布人数	累積人数
650-695	1	1
600-645	1	2
550-595	1	3
500-545	1	4
450-495	5	9
400-445	11	20
350-395	27	47
300-345	28	75
250-295	42	117
200-245	38	155
150-195	9	164
100-145	3	167
50-95	0	167
0-45	1	168

表 14 技能別得点分布表

リスニング/495			リーディング/495	
分布人数	累積人数	得点	分布人数	累積人数
1	1	400-420	0	0
0	1	375-395	0	0
1	2	350-370	0	0
1	3	325-345	0	0
1	4	300-320	0	0
5	9	275-295	0	0
12	21	250-270	2	2
18	39	225-245	2	4
19	58	200-220	5	9
33	91	175-195	9	18
42	133	150-170	20	38
24	157	125-145	19	57
7	164	100-120	40	97
2	166	75-95	40	137
1	167	50-70	24	161
0	167	25-45	4	165
1	168	0-20	3	168

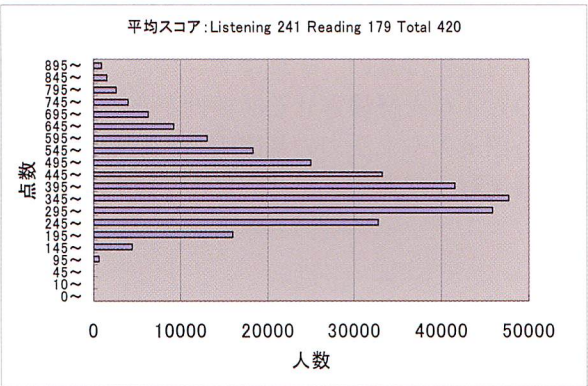


図 18 学校 IP スコア分布

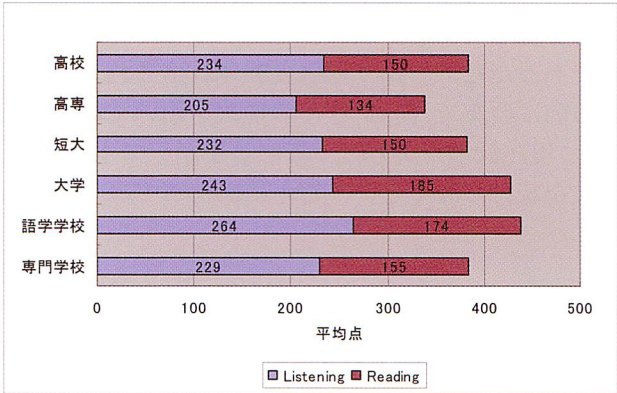


図 19 所属学校別スコア平均点

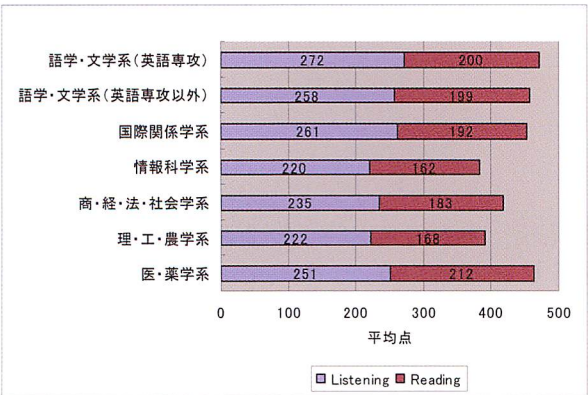


図 20 専攻学科別スコア平均点

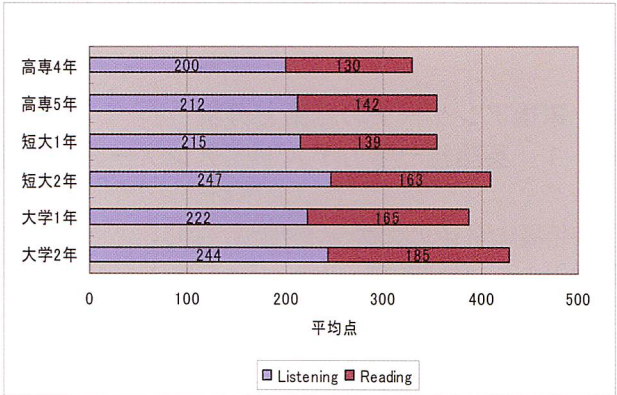


図 21 短大・高専・大学の学年別スコア平均点

表 15 各項目平均点と本校平均点の比較

	平均点	格差
全体	420	-121
高専	339	-38
理・工・農	390	-91
高専 5 年	354	-55
短大 2 年	410	-111
大学 2 年	429	-130

次に平成 16 年 4 月から平成 17 年 3 月までの学校 I P テストデータを示す。まず全体のテストのスコア分布は図 18 にあるとおりで、最も人数の多い範囲は 295～390 点で全体の約 30% を占めている。学校 I P 受験者の平均点は 420 点であった。また、図 19 における所属学校別スコアを見てみると、「高専」の平均点は他学校よりも低く 339 点であり、さらに専攻学科別スコア（図 20）では、本校学生の専攻となる「理・工・農学系」の平均点が 390 点である。また短大・高専・大学の学年別スコア（図 21）によると、高専 5 年生の平均点は 354 点、そして高専 5 年生と同学年にあたる「大学 2 年生」もしくは「短大 2 年生」の平均点はそれぞれ 429 点、410 点であった。これらを今回の本校 5 年生の平均点と比べた結果が表 15 であり、どの比較においても本校 5 年生が下回っていることがわかった。

5. 3 今後への展望

授業の中で TOEIC 対応の練習問題をやってきたが、点数としてはやや厳しい結果となってしまったことは残念である。ただ、テストとして正式に TOEIC を受けたのは今回が初めてである学生がほとんどであったため、繰り返し受験すればこれよりも点数は上がる可能性は高い。それゆえ今後は、5 年生になる前に授業で「模試」などの形式を用いて本番に近い形で TOEIC を経験させる必要があるだろう。また、現在低学年から行っている単語テストや多読、精読による語彙力や文法力の基礎固めを継続しつつ、英文を読む、聞くということにあたっては、より実践的な練習を行う学習指導をしていかなければならない。

6. 事後アンケートの結果と分析

6. 1 英語統一学力テスト・アンケートの実施

昨年度の事後アンケート実施にならい、今回行われた英語統一学力テスト終了後 2 週間程度までの間に各学年の英語授業（1～3 年生は英語 A、4・5 年生は英語 C の授業）時に、記名でのアンケート調査を実施した。

6. 事後アンケートの結果と分析

6. 1 英語統一学力テスト・アンケートの実施

昨年度の事後アンケート実施にならい、今回行われた英語統一学力テスト終了後 2 週間程度までの間に各学年の英語授業（1～3 年生は英語 A、4・5 年生は英語 C の授業）時に、記名でのアンケート調査を実施した。

6. 2 アンケート質問事項

アンケートの質問事項は下記の通りである。

A. 実施環境について

Q1. 実施時期はどうでしたか？ また希望実施時期はいつですか？

良い／悪い

4～6月／7～9月／10～12月／1～3月／試験期間直前直後

Q2. 実施は前期定期試験終了後の翌日1時間目からでしたが、精神的・体力的には辛かったですか？

はい（非常に）／はい（多少は）／いいえ

Q3. 前期定期試験終了後の翌日ではなく平常授業日に受験していたら、より良い点が取れたと思いますか？

はい（非常に）／はい（多少は）／いいえ（変わらない）／いいえ（むしろ悪い）

Q4. 今後、どの時間帯で受験することを希望しますか？

1・2講目／3・4講目／5・6講目／7・8講目／補講時間帯

Q5. 英語学力試験中、試験に正常に取り組めましたか？

正常に取り組めた／

リスニング中教室内の雑音が障害となった／筆記試験中教室内の雑音が障害となった

リスニング中教室外の雑音が障害となった／筆記試験中教室外の雑音が障害となった

Q6. Q5. で「正常に取り組めた」以外を選んだ人は、その雑音が何か下に書いて下さい。

B. 試験について

Q7. 今回の試験についての意義は理解していますか？

はい（十分に）／はい（多少は）／いいえ

Q8. リスニングテストの難易度は全体的にどうでしたか？

難しい（非常に）／難しい（多少は）／易しい（多少は）／易しい（非常に）

Q9. リスニングテスト以外の筆記テストの難易度は全体的にどうでしたか？

難しい（非常に）／難しい（多少は）／易しい（多少は）／易しい（非常に）

Q10. テスト全体としての難易度はどうでしたか？

難しい（非常に）／難しい（多少は）／易しい（多少は）／易しい（非常に）

C. 今後について

Q11. もしあなたが実用英検を取得していれば、その最も上の級を記して下さい。

5級／4級／3級／準2級／2級／準1級／1級

Q12. Q11. で回答した人は、その級を取得した時期を記して下さい。

Q13. 今後、実用英検やTOEIC等の外部の英語学力試験を受験してみたいですか？

はい（実用英検）／はい（TOEIC）／はい（その他の試験）

いいえ／わからない

Q14. 今後、統一テストの日に学内で受験する英語学力試験では何を受験したいですか？

英語能力判定テスト（英検ベース）／英語運用能力テスト（ACE）／

実用英検（本会場・準会場）／TOEIC（公開会場）／TOEIC-IP（学校団体受験）

Q15. その他、何かあれば下に自由に書いて下さい。

6. 3 アンケートの結果

記号選択式設問の結果は、以下のグラフのようになった。なお、グラフの縦軸は%である。

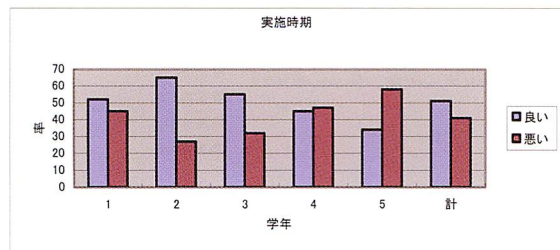


図 21

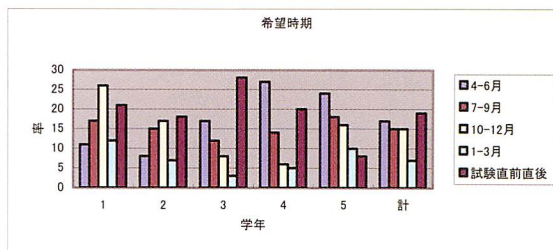


図 22

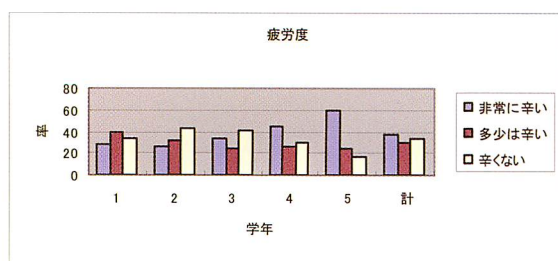


図 23

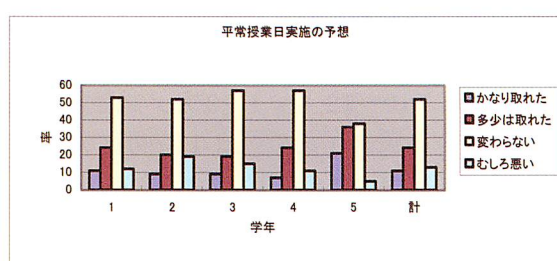


図 24

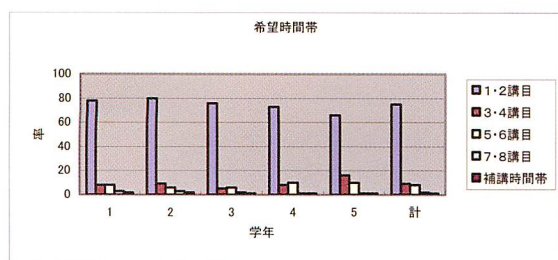


図 25

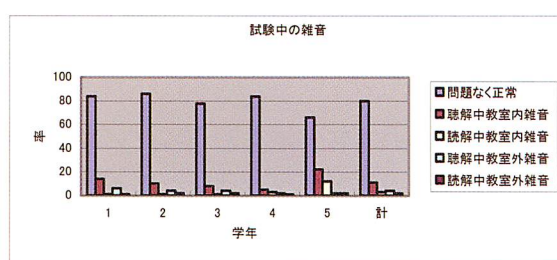


図 26

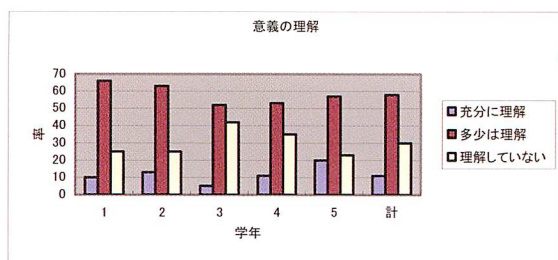


図 27

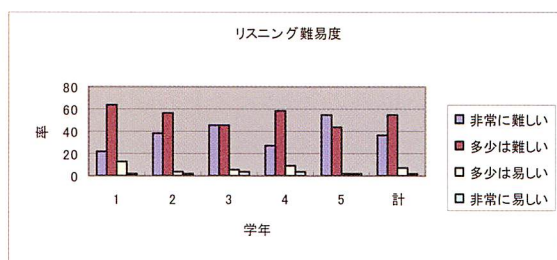


図 28

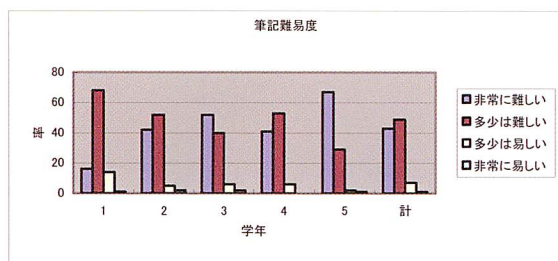


図 29

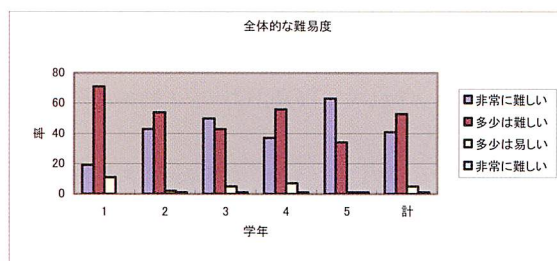


図 30

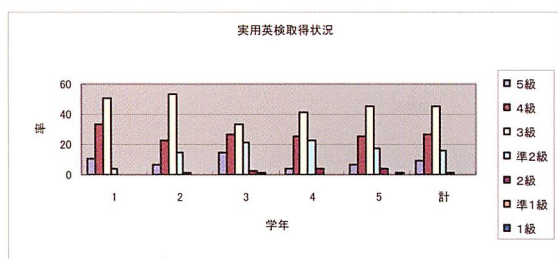


図 31

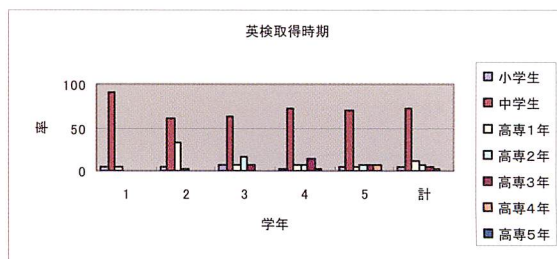


図 32

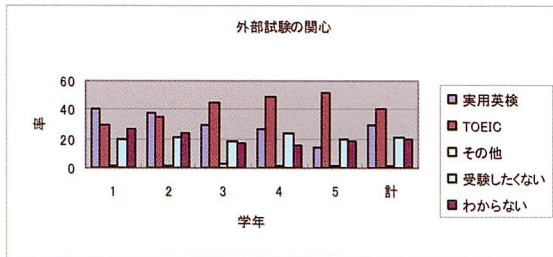


図 33

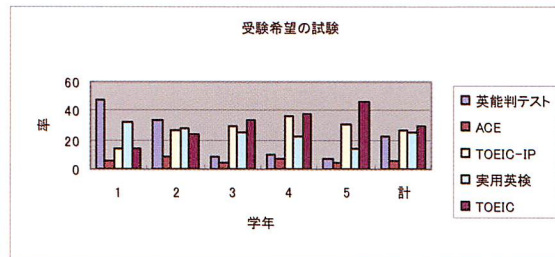


図 34

また、自由記述式設問の Q5 と Q13 に関しては、3 名以上の学生が指摘した意見のみ以下に箇条書きにて書き記す。

(Q5)

試験監督教員の声・試験監督教員による窓や扉の開閉音・咳やクシャミの音・机や椅子のきしみ音・他のクラスのリスニング音・いびき・試験監督教員の携帯電話着信（マナーモード）による音声機器のノイズ・ページをめくる音・CDプレーヤーの故障（音飛び）・

(Q13)

時間が足りない・当初の臨時休業日に行わないでほしい・学力を図るための学力試験ではなく実用的な資格試験を受けたい・定期試験終了後の実施は辛い・成績に加えないでほしい・昨年に比べて午前で終るのは良い・試験監督教員がいるのに私語が多かった・

6. 4 アンケート結果の分析と考察

実施時期について、1～3 年生（低学年）においては、今回の実施時期を「良い」とする回答が過半数の 50%を超え、一定の支持を得たことが図 21 よりわかる。今年度初めて受験した 1 年生よりも昨年度受験の経験がある 2・3 年生の方が支持する回答がさらに多く、理由として補講時間帯における実施だった昨年度に比べ、今年度は統一テストの日という独立した日を設け、しかも 1 講目からの実施であったため、学生には好印象だったのであろうと推測できる。一方、4・5 年生（高学年）は「悪い」という回答が 50%を超えた。後述する Q2 での希望時期に関する回答においても、高学年ほど 4～6 月の実施をもっとも支持しており、定期試験後という状況に加え、5 年生においては卒業研究、4 年生においてはインターンシップの報告会準備など多忙な時期であることが要因であると言える。

希望時期について、5 年生以外は「試験期間直前直後」の実施を希望していることが図 22 から明らかである。どの項目も 10～20%強の割合であるため、多数の意見を反映しているわけではないが、各学年の回答の特徴として、3～5 年生（中・高学年）は早い時期の実施、特に 4～6 月の実施を希望している反面、1・2 年生（低学年）は遅い時期の実施、特に 10～12 月の実施を希望している。全体としては、試験直前直後の実施が最も希望が多く、1・2 時間目の実施についても高い評価であったことから、今回の実施時期や実施希望時間帯についてはかなりの支持を得たものと解釈してよいだろう。

疲労度に関して、昨年度受験したことのない 5 年生にとっては、他学年に比べ特に疲れを感じた者が多く「非常に辛い」を選択した学生が 60%近くおり顕著である。また自身の卒業が左右される年だけに、定期試験後に学力試験を受験するということは大変だったかもしれない。一方、昨年度受験した 2～4 年生については、疲労を感じている学生はいるものの、補講後に受験をしたということで大変な疲労があった昨年に比べ、今年度は辛くないと回答している学生も 4 割程度おり、特定の独立した日を設定して、1・2 講目から実施した今回の試験は一定の成功を収めたと言えよう。

懸念された試験中の雑音であるが、一部自由回答欄で問題を指摘した学生も見られるが、60～80%の学生が問題なく受験できたと回答しており、教員の巡回などの対応により十分な試験環境を提供できたと思われる。

英語統一学力試験に関する意義の理解については、図 27 から次のようにわかる。理解できていない学

生が全体の半分程度いた昨年に比べ、今年度は十分に理解・多少は理解している学生が60%程度おり、理解していない学生を大幅に上回っている。本校における英語の重要性が理解できてきたこと、TOEICなどの外部の基準による英語力評価が浸透していることが考えられる。ただ、「十分に理解」している学生が10%程度であるため、より一層の意義の働きかけは必要であろう。一方、試験の難易度としては、図28より、今年度初めてリスニングの試験を受験しかつTOEIC-IPを受験した5年生にとっては、リスニングの問題が非常に難しかったようで、他の学年が20~30%程度であるのに対し50%以上の学生が「非常に難しい」と回答している。その他1~4年生でも多少は難しいと回答している割合が高く、全体としても難しいと感じた学生がかなり多いようである。また、筆記試験でも、TOEIC-IPを受験した5年生や英検のような試験とは異なるTOEICに類似した形式のACEを受験した3年生で、「非常に難しい」と回答している学生の割合が高く、それぞれ67%、52%と過半数を超えており、他学年と比べ顕著であることが図29からわかる。本校の英語学力がTOEICを基準としていることを考えると、TOEICを意識させるためにも、低学年においても中学校の頃から慣れ親しんだ実用英検に加え、徐々にTOEICにシフトさせながらTOEICの感覚を養うことができる試験を受験させた方が、拒否反応を示すことなくスムーズな移行ができることを示唆しているものと考ええる。1年生は「非常に難しい」と感じている割合が、多少は難しいと感じている学生よりも、他学年に比べて極端に低く(19%)、受験させる英語能力判定テストが適切であったかどうかを含め、レベル(今回はC)や試験そのものも含めて再検討することが必要であろう。

上記の外部試験に対する関心は、図31の実用英検取得状況からみてもわかり、4・5年生の高学年においては、英検準2級の取得率が20%程度でほとんど横這いであるのに対し、1~3年生の低学年では準2級の取得が4%から21%と伸びを示していることから、低学年においては英検に関心があると判断できよう。しかしながら、中学校での英検受験以来、高専に入ってから受験している学生はかなり少なくなっていることが図32からわかる。英検取得を強く考えている学生は中学校から継続して受験していると思われるが、高専入学後は英語力の基準がTOEICを対象としていることもあり、中学校の時に英検を取得したと回答している学生が60~70%であるのに対し、さらに上の級を高専入学後に受験を志す学生が急激に少なくなり、実際高専入学後に取得したと回答している学生は10~20%に留まっており、高専入学後、特に高学年では英検の関心が薄いことがわかる。

実際、図33を見ると外部の英語学力試験に関する関心として、1・2年生の低学年では、TOEICには30%程度の学生が、英検には40%程度の学生が関心を示していることから、TOEICよりも英検の方に関心が向けられていることが明らかである。これは中学校からの影響といえる。一方、入学後3~5年を経た学生に関してはTOEICに関心が移ってきており、5年生の頃には全体の半数以上がTOEICに関心を持っていることがわかる。これは、本校における英語能力の到達目標がTOEICによる評価であることが学生に浸透してきているものと判断する。また、1年生においては外部試験に対する関心がわからないと回答している学生がいても、5年生になるまでに徐々に関心をもつようになっていることも明らかとなった。

統一テスト時の受験希望の試験については図34から次のように言える。1年生においては英語能力判定テストや実用英検の受験希望者の割合がTOEIC-IPやTOEICの受験希望者の倍近くおり、それは中学校から慣れ親しんだ英検の影響があるためであると思われる。2年生までは英語能力判定テストや英検の割合が多いものの、徐々にTOEICの関心も増えてきており、3年生には英検ベースの英語能力判定テストを受験したいと希望している学生は9%とほとんどいない。3・4年生ではTOEICに関心が移っており、TOEIC-IPの受験希望が多いが、5年生では就職・進学も控えていることから、履歴書に記載することができるTOEICの受験希望が約半数の46%と多い。一方、ACEの受験希望はどの学年においても4~8%と極めて少ない。それは学力テストとしてだけのテストであり、社会的に認められた基準がある英検やTOEICに比べて、基準を持たないACEには関心が薄いようである。ただ、実情として、ある学年全員にTOEICや実用英検を受験させることは、費用が高額で会場開設にも困難があるため実施はかなり難しく、費用が低く抑えられる英語能力判定テストやACEのような学力試験を実施する方が現状では最善であろう。しかしながら、今後は上記の結果や学校の方針を踏まえ、TOEIC-IPやTOEIC-BridgeなどTOEICに準じた試験を学力試験として課すことも、検討課題として考えなければならないだろう。

7. まとめ — 今後に向けて

英語学力テストは、そもそも、各方面からの「高専の卒業生は英語力が低い」という指摘に対応し、苫小牧高専学生の英語力向上を図ろうという取り組みの一つとして企画された。大学受験がなく、英語を学習する動機が乏しい高専生に対し、全国の同年代の学生・生徒との比較に於いて、英語力がどのくらいのレベルにあるのか明確にした上で、必要な対策を施して行こうとしたのである。つまり、英語学力試験を初めて公式に提唱した、東(2004)の第7章でも述べられている通り、本校学生全員がこのような英語力を測る試験を受けることで、苫小牧高専以外の学校の生徒／学生の英語力とも客観的な比較をする事ができるようになり、中間・定期試験ではなかなか測りにくい部分を補うことができ、それに加えて、大学入試を控えていない高専に於いて何よりも学生にかなりはっきりした目標を提供したいと考えたのである。

そのため、当初から外部テストを利用することを念頭に置いていた。これに対し、外部テストを用いて試験をする意図や目的が、学内では、すぐには理解されなかったり、受験料徴収に対する抵抗感がかなり強かったため、外部テストは採用せずに、英検準2級の過去問をベースにして、2003年12月8日に「第2学年英語学力試験」が試行され、一定の成果があげられた。

これを受けて、2004年7月6日の7時間目終了後に「第1回英語学力テスト」が1～3年生を対象に実施されたのだが、今年度は更に対象を5年生までに拡大し、全校の協力を得て「第2回英語学力テスト」が実施されるに至ったのは前の章までで述べられているとおりである。それにしてもここまで規模を拡大して英語学力テストが実施されるとは、3年前にはほとんど予測不可能であった。意外なほど早くここまで辿り着けたのは、JABEE受審に伴ってTOEICが非常に重視されるようになってきたことがその理由の一つに挙げられるだろう。特に専攻科に於いては修了するためにTOEIC(あるいはTOEIC-IP)400点以上を獲得しなければならないが、このことが全校的に強く意識されるようになっていることが英語学力テストの拡大実施が可能になった要因となっていることは否めない事実だろう。

一方、このように4～5年に拡大して実施することにしたことから、教務委員会の議題として正式に扱われる事項になり、試験監督として全校の教員の中から試験監督を選ぶことになるなど、全校的な協力を得ることができたことも、大きな収穫であったと思う。

さて、今回の英語学力テストは、上述のように、昨年度1～2年生に実施した英語能力判定テストと3年生に実施したACEに加え、4年生にACE、5年生にTOEIC-IPと対象を拡大して実施された。これは、当初提案されていた、1～2年生に英語能力判定テスト、3年生にACE、4～5年生TOEIC-IPという学年別構成とほぼ同じであるが、一点、4年生に受験させるテストをTOEIC-IPからACEに変えている部分が異なっている。当初のTOEIC-IPからACEに変更した理由は、前年度の3年生で受験したACEからどのくらい英語力が伸びたのか、比較的容易に知るためには同じテストを使うことが適当であるからである。また、ビジネス英語主体のTOEIC-IPに比べて、ACEのほうが生徒・学生向けであるだけより馴染みやすい内容になっており、レベルもちょうどよい、という理由からでもある。

「事後アンケートの結果と分析」の章でも触れられていたとおり、低学年から高学年にかけて、中学校で馴染んできた英検ベースの英語能力判定テストから、英検とTOEICの両方の要素をバランス良く兼ね備えたACE、そして就職や大学、あるいは専攻科への進学を控えた最終学年でTOEIC-IPを受験するという学年別の構成は、英語授業の実際と引き比べて考えても、ほぼ妥当ではないかと考えている。

但し、専攻科修了要件がTOEIC400点以上という基準が明確にされ、本科から専攻科への入学する学生が増加している現状を考えると、例えば4年生くらいからTOEIC-IPを受験させ、TOEICの内容や難度、解答スピードの速さなどを体験させると共に、心の準備をさせることも必要になってくるのではないだろうか。多くの4年生にとっては難度が高くて、なかなか思うように解答できない可能性は大きい。しかし、どのようなテストなのか肌で実感できることは非常に有意義であろうし、優秀な学生であれば、400点以上をこの時点でも獲得できる可能性も大いにあるだろう。もう少しこの考えを敷衍するのであれば、2～3年生に一度位はTOEIC Bridge-IPを受験させて、TOEICの形式に慣れさせることも視野に入ってくるかもしれない。ただこのようにして、TOEIC-IPやTOEIC Bridge-IPを受験させる場合、後述する「同一種の試験実施の継続によるメリット」を考慮

に入れば、「英語学力テスト」という枠組みにはこだわらず、別の機会を設けて実施するという方法も考えられる。

今年度の5年生が今回初めて英語学力テストを受けた以外は、今年度の2年から4年まで既に昨年度第1回の英語学力テストを受けている。それで、前述の各テストの結果分析では、英語能力判定テストについて、今年度の2年生の今回と昨年度1年生に受けた時との比較、そしてACEについて、今年度の4年生の今回と昨年度3年生に受けた時との比較ができるようになったのは、先述されているとおりである。本校の英語教育をより良いものにしていく基礎データとして、このような比較は有効に活用できるものであるし、今回のように前回から成績が伸びていることが明らかになれば学生・英語科教員共々励みになることは確かである。

ただ、英語学力テストはまだ2回目の実施であり、5年生まで拡大して実施したのは今回が初めてのことで、まだ緒についたばかりである。今後この試みを定着させて行くにはある程度の期間、同一の方式や内容で実施して行くべきだろう。目安としては、現在の2年生が5年生になった時に、英語学力テストで現在採用しているテストを全種類受けることになるので、この時点まではしばらく現状通り実施していくのが妥当なのではないだろうか。学力試験に使えるような外部テストはまだいくつかあるので、それらを使用してみたいという考え方も有り得るかもしれない。しかし、基礎データとして活用する場合、同一学年、同一種の試験での経年変化を定点観測的に比較する方法が最もわかりやすく、利用しやすいものになるはずで、そういった意味では使用している外部テストによほどの問題等が生じない限り、粘り強く使い続けていくほうが結果的にメリットが大きいと思われる。

いずれにしても、この「英語学力テスト」が来年度以降順調に継続されていき、苫小牧高専の学生の英語力が順調に伸びていく様子を記していく里程標となっていくことを願いたい。そして、それは全学挙げた強力なバックアップによって支えられていることに改めて感謝しつつ、今年度の報告を閉じる。

執筆担当者

1. はじめに・・・・・・・・・・堀 登代彦
2. 学力テストの実施運営方法・・・・堀 登代彦
3. 英語能力判定テスト・・・・山西 敏博
4. 英語運用能力テスト（ACE）・・堀 登代彦
5. TOEIC-IP・・・・・・・・松田 奏保
6. 事後アンケートの結果と分析・・・小野 真嗣
7. まとめ・・・・・・・・東 俊文

参考資料

- 1) 2) 日本英語検定協会(2005)「テストの特徴・テストの詳細」 英語能力判定テスト
<http://www.eiken.or.jp/placement/index.html>
- 3) 日本英語検定協会(2005)「成績表示の例」 英語能力判定テスト
<http://www.eiken.or.jp/placement/seiseki/index.html>
- 4) 苫小牧工業高等専門学校(2005)「C-5 英語で簡単なコミュニケーションをとることができる」5 教育プログラムの履修について 5-7 教育プログラムの各学習・教育目標の達成 学習・教育目標とその評価方法 (C) コミュニケーション pp.16 平成17年度「環境・生産システム工学」教育プログラム履修の手引き(H17/4/25 改訂版) 北海道：苫小牧工業高等専門学校
- 5) 苫小牧工業高等専門学校(2005) 対象・認定する単位数 5 国苫小牧工業高等専門学校における文部科学大臣認定技能検査の合格に基づく単位認定に関する内規 平成17年度 学生便覧 北海道：苫小牧工業高等専門学校 pp.33

参考文献

- 6) 菅原隆行(2005) 2 秋田高専の英語の授業カリキュラム改正 低学年における英語の基礎力と
TOEIC の成績の関連性 全国高等専門学校英語教育学会 研究論集第 24 号 福井：全国高
等専門学校英語教育学会 pp.56,62
- 7) 東俊文 (2004) 専攻科に於けるパソコンを使った授業についての覚え書き 苫小牧工業高等専門学
校紀要 Vol. 39 pp185-196
- 8) 東俊文・堀登代彦・松田奏保・小山直子 (2005) 苫小牧高専に於ける英語学力試験導入について 全
国高等専門学校英語教育学会研究論集 第 24 号 pp9-18
- 9) 堀登代彦・小山直子・山西敏博・東俊文・松田奏保・小野真嗣 (2005) 苫小牧高専における英語学
力テスト導入について 苫小牧工業高等専門学校紀要 Vol. 40 pp73-84

(平成17年12月15日受理)

1. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$

2. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$

3. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$

4. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$

5. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$

6. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$